

ビジネス・エシックスの普及における

永安先生の功績

大野 正英

私が永安先生に初めてお会いしたのは、大学在学中のことでした。当時早稲田大学にあったニューモラル研究会に顔を出すようになったのがきっかけで、それ以来四半世紀にわたって公私ともにお世話になってきました。特に一九八八年にモラロジー研究所に入所して以後は、社会科学研究室（旧経済研究室）の室長として、また研究センターのセンター長として、お亡くなりになるまで永きにわたり、時に厳しく、また時に温かくご指導をいただきました。十分にご期待に応えることができなない不肖の弟子でありましたが、お亡くなりになる直前までずっと気にかけていただきましたことに、深く感謝しております。

永安先生のご専門は、経済学、社会システム論でしたが、それにとどまらず、研究領域は非常に広範囲にわたっていました。若い頃から、難波田春夫先生、玉野井芳郎先生をはじめとする多くの碩学の薫陶を受けてこられました。また常にグローバルな視点から物事を捉えることを心がけてこられ、積極的に海外に足を運ばれました。若い頃は、東南アジアやインドなどアジア諸国の調査研究に向われ、海外で開催される学会や国際会議に頻繁に参加されてきました。その目的は、研究成果を発表し、海外の学者と議論を戦わせる

ことにありましたが、同時に海外の新しい研究動向を取り入れることにも非常に熱心でした。私も一度ロンドンに同行したことがありますが、行きつけの書店に向かれ、ダンボール数箱分の書籍を購入され、日本に送られました。

特に一九九〇年代以降は、応用倫理学に関する海外の研究成果を日本に紹介することに力を注がれました。現代倫理学を導入することで、倫理道德の学としてのモラロジーの現代化を進めるとともに、モラロジー研究所・麗澤大学から国内に向けて情報を積極的に発信することで、日本の研究水準を高めていこうという意図がそこには込められていました。中でも日本におけるビジネス・エシックスの普及・発展における永安先生の功績は、非常に大きいものがあります。一九九〇年代後半からの十年余りの間に、日本における経営倫理への取り組みは急速に進みました。現在ではほとんどの企業が「企業の社会的責任（CSR）」への取り組みを打ち出し、経営倫理に取り組む研究者の数も急増しましたが、こうした隆盛の背後に、永安先生の鋭い着眼と情熱的な献身があったことをここで紹介させていただきます。

モラロジー研究所がビジネス・エシックスに本格的に取り組むきっかけとなったのは、一九八九年十二月にモラロジー研究所主催で開催された「アジア経済文化国際会議」でした。ちょうど私にとって入所二年目のことでした。「グローバルゼーションと経済倫理」というテーマの下で開催された同会議には、アジア各国の研究者や実業家が参加されましたが、基調講演者としてアメリカカのビジネス・エシックス学界の中心人物であるトーマス・ダンフィー教授（ペンシルバニア大学、二〇〇八年逝去）が招聘されました。当時、徳永澄憲研究員（現筑波大学教授）がペンシルバニア大学に留学中で、そこでアメリカ最高峰のビジネススクールの一つである同大学のウォートン・スクールのダンフィー教授と知遇を得られたことが招聘へとつなが

りました。「国際ビジネスにおける倫理の役割」と題した基調講演の中で、ダンフィー教授は最新の研究動向にも触れながら、ビジネス・エシックスの基本的な考え方を紹介されました。この会議の記録は、『グローバル時代の経済倫理』として一九九〇年に廣池学園出版部より出版されています。

このダンフィー教授の講演は、日本においてビジネス・エシックスの概念が本格的に紹介された初めてのものだったと思われます。それまでの日本の経済界においては、商道德の観念という伝統はあり、一部の経営者の中には高い道徳性を意識した経営を指向するものもありましたが、全体として経営と倫理道德の間の問題に対して体系的に取り組もうという動きは、経済界においても、また学界においてもほとんど皆無に等しい状態でした。当時の研究部でも、廣池千九郎博士の「道経一体思想」に関する研究は進められていましたが、時代に応じた新たな展開を求められている状況でした。

この会議をきっかけとして、永安先生をはじめとする経済経営研究室のメンバー（土屋武夫研究員〔現麗澤大学教授〕、高巖研究員〔現麗澤大学教授〕、中野千秋研究員〔現麗澤大学教授〕）は、ビジネス・エシックス研究に本格的に取り組むこととなりました。中野研究員はジョージ・ワシントン大学大学院（アメリカ、ワシントンDC）へ、次いで高研究員がペンシルバニア大学ウォートン・スクールへと、ビジネス・エシックスの研究のためにそれぞれ留学することとなりました。同時に一九九一年九月には、モラロジー研究所主催で「ビジネス・エシックス東京国際会議」を開催することとなりました。日本で初めてビジネス・エシックスを正面から取り上げたこの会議には、アメリカからトーマス・ダンフィー教授（ペンシルバニア大学）、トーマス・ドナルドソン教授（ジョージタウン大学）、ノーマン・ポウイ教授（ミネソタ大学）、ヨーロッパからはジョージ・エンデーレ教授（スイス、ザンクト・ガレン大学）、アンリ・ベティニーズ教授

(フランス、INSEAD)、ブライアン・ハーベイ教授(イギリス、ヨーロッパ・ビジネス・エシックス・ネットワーク)といった錚々たる顔ぶれが顔を揃えました。いずれも欧米のビジネス・エシックス研究をリードしてきた学者ばかりで、当時はそれほど感じなかったことですが、今から振り返ってみると、よくぞこれだけの人たちが参加してもらえたと思えるほどの顔ぶれで、これはひとえに永安先生が短期間で築き上げられた人脈によるものでした。

この会議を契機として、モラロジー研究所および麗澤大学は日本におけるビジネス・エシックス研究の拠点として、世界的な認知を受けることになりました。永安先生は、ビジネス・エシックスの国際学会であるISBEE (The International Society of Business, Economics, and Ethics) の理事を一九九二年から二〇〇〇年まで二期にわたって務められましたが、そこでISBEEよりモラロジー研究所に対して思いがけない提案がもたらされました。世界中のビジネス・エシックスの研究者が一同に会する第一回の世界大会を、モラロジー研究所がホストとなって開催できないかというものでした。これまで、アメリカとヨーロッパにおいてはそれぞれの学会が年次大会を開催してきましたが、それをさらに広げてグローバルなネットワークを構築しようというものでした。特に成長著しいアジア地域においてビジネス・エシックスを広めたいと考えた研究者たちによって、日本に白羽の矢がたてられたわけです。これまでに前例のない試みであり、かなりの大規模な事業となるため、永安先生も相当迷われたようですが、研究所の理解と全面的協力を得て、モラロジー研究所とISBEEの共催で一九九六年の開催が決定されました。日本側開催責任者として、永安先生は、プログラムの決定、招聘講演者の選定、参加者の宿泊や移動の手配など困難な問題を数多く抱えられましたが、ISBEE側の責任者であるジョージ・エンデーレ教授との強力な信頼関係に基づい

て問題を一つ一つクリアされて、一九九六年八月の開催に至ることができました。同会議には二百名を超える研究者や実業家が世界中から集まり、熱のこもった発表と議論が四日間にあつて続きました。基調講演者には、後にノーベル経済学賞を受賞する経済倫理学の第一人者であるアマルティア・セン教授、地球倫理の提唱者であるハンス・キュング教授らといった堂々たる顔ぶれを迎えることができました。この後、同会議は四年ごとにサンパウロ（ブラジル）、メルボルン（オーストラリア）と引き継がれ、二〇〇八年にはケープタウン（南アフリカ）で第四回の会議が開催されました。私も参加いたしました。回を追うごとに参加者数も出身国も増えている現状を見ると、この隆盛の礎を築かれた永安先生のことを思い出し、感慨を新たにしました。

また、一九九五年には、モラロジー研究所と麗澤大学のスタッフが中心となり、アメリカの代表的な教科書であるリチャード・デイジョージの『ビジネス・エシックス』を翻訳し、出版にいたしました。同書は二段組で七百ページを超えるというかなりの大著でありましたが、監訳にあられた永安先生は何度も推敲を繰り返し、細部にいたるまで訳文に手を入られました。この他にも、立木教夫先生（麗澤大学教授）と共同で監訳された『生命医学倫理』（トム・ピーチャム&ジェイムズ・チルドレス著）や、『IT社会の情報倫理』（ジョセフ・キツザ著）など、応用倫理学の分野の代表的な教科書の翻訳を手がけられました。また、『コミュニティアニズム（共同体主義）の代表的な指導者であるアマタイ・エチオーニの『新しい黄金律』も翻訳され、日本にコミュニティアニズムの精神とそれに基づく運動を根付かせようと試みられました。

これらのいずれもがその分野の基本的議論を網羅している良著であり、日本の学界にとつて非常に有益なものでした。先生は、欧米の研究に対して時に批判的な言葉を向けられることもありましたが、原理原則を

重視し、論理的に議論を詰めていく欧米流の学問の姿勢に対しては、日本の学問に欠けているものだと高く評価されていました。基本的教科書の翻訳を続けられたのも、そうした思いに基づくものでした。私も『IT社会の情報倫理』の出版に際しては共同監訳者としていただきましたが、正確にかつ読者に真意が伝わるようにとの意図から何度も推敲を繰り返される永安先生の姿勢は、他の執筆や翻訳の作業においても同様であり、頭の下がる思いで一杯でした。

経営倫理や企業の社会的責任が当たり前のように経済界で語られる現在から見ると、一九八〇年代末に永安先生が始めてビジネス・エシックスに取り組まれた頃は、まさに隔世の感があります。そこに道を拓き、日本社会をリードした永安先生の功績を忘れることはできません。

永安先生の人生は、旺盛な知的好奇心と豊富な読書量、そして何よりも学問的情熱に支えられて走り続けられてきた一生だったと思います。それに追いつくことなど到底できることはありませんが、後進の一人としてその遺志を受け継ぎ、学問の発展と社会の改善に努めることで、長年の学恩に対して報いていきたいと考えております。